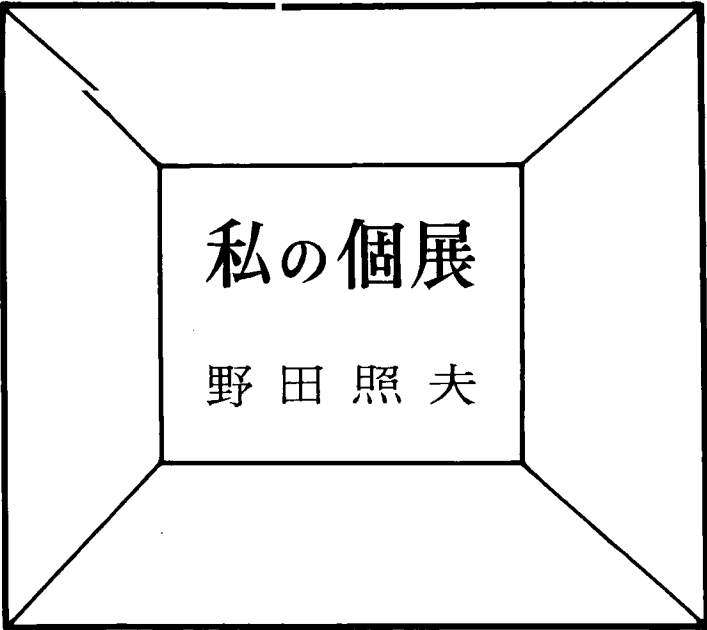


私の個展

野田照夫



私の個展

野田 照 夫

私 の 個 展

野 田 照 夫

明治40年8月1日長野県
飯田市生れ。本名北原次
郎，法学書院社長。著書
「浮き沈み二十年」「静脈
動脈」「ことわざ博物誌」
その一～その四。

昭和三十九年九月十五日発行

定価 三五〇円

著 者 野 田^だ 照^{てる} 夫^お

発行者 北 原 次 郎

印刷者 伊 藤 喜 通

発行所 株式会社 法 学 書 院

東京都文京区高田豊川町六〇

電話(941)三七二一・八七六五

振替東京 八一六九九番

順

序

第一室

雪舟の山水	11
あかない幕	16
色ザラの目録	21
長崎のカステラ	25
失敗旅行	31

第二室

英語の笑い	43
微苦笑辞典	51
坊主の隠語	59

読書の知恵……………64

二冊の本……………71

前後左右の書……………76

出版社名判断……………79

第三室

恩人……………87

利息十割……………94

傾いた家……………99

暁天の星……………105

雪泥の差……………110

借用証書……………115

くたびれもうけ……………118

暗い公文書……………122

借金戦術……………128

旧婚旅行……………135

第四室

さかさカラー……………143

闇取引……………148

隣りの布団……………154

母の戒名……………158

病気……………164

とんだ失敗……………167

自己出版……………178

自画像……………183

世相あれこれ……………188

第五室

人……………197

身……………202

心……………208

血……………214

色……………219

雌雄……………223

うそ……………227

あとがき……………235

私の
個
展

第一室

雪舟の山水

私が結婚したころは方々に貸家があり、転々と越して歩くことができた。三度目に引っ越した家に、はじめて床の間があつた。

床の間があるからには、何か掛物をかけるのが日本座敷の常識のようだし、何もなくてはいささか殺風景。そこで金三円也を奮発し、「天下の古道具屋」という看板の出ていた店から、水鳥が二羽描かれている古ぼけた掛物を買つてきてかけた。

転々と家は変わったが掛物は旧態依然。指折り数えて見ると十年になるから、十年間、春夏秋冬、同じ掛物をかけて平然としていたわけになる。

その後、頼まれて買ったたり、色々の事情で求めたりして掛物もふえたが、みんな疎開先ですすけさせてしまった。

家の中でどんどん火を焚いて、飯をたいたり煮物をするからたまらない。物の見事にすすけてしまった。あんまりすすけてしまったために私の手もとに残っているのである。すすけていなか

つたら、とうの昔にタケノコ生活のいい材料になってしまったことであろう。

震災にはあわなかったが、あったと同様の憂き目にあい、疎開するとき持っていた金も使いはたし、品物もほとんど食糧にかえてしまつて、着のみ着のままで東京に舞い戻つた。

東京に帰つてからも、すすけたのをかけていたが、いかにも、ものすごいので買うことにした。

新宿へ出たついでに古道具屋に寄つたところ、雪舟の山水があつた。三千円の正札がついてた。

雪舟といえは国宝的な絵なのに、三千円とはバカに安い。ニセモノかと店員に聞いたら、

「本物ですが、コロタイプ印刷です」

とすましていた。

印刷とは思えないほど精巧に出来ていて、ちよつとだまされやすい。これがいいと買つて歸つた。床の間にかけて見ると、なかなかよろしい。これならちよつとごまかせるわいと悦にいつていた。

郷里からS氏が来たとき、たまたまこの掛物がかかつていた。この人は骨董に興味があり、いろいろの掛物を持つている。雪舟の落款を見て、「箱を見せてほしい」ときた。

本物なら相当なもので、とても私のところなんかにあるはずがない。ニセモノに違いない。し

かし、「本物ですか」と聞くのも失礼と考えて、「箱を見せてほしい」といったのだろう。箱を見ればバケの皮がはげるので、ためらっていたが、たつてのご所望なので見せてあげた。

「ああ、そうですか」

といったきりだったが、あきらかに安堵の色が顔にあらわれた。

骨董に興味のある自分も持っていないようなものを、私のような者が持っていたのではコケンにかかわる。本物でなくてよかったと安心したようだった。

このほか、この掛物に対して不審を抱いたのは井上さんとK君の二人。

井上さんは国学院を中退しているが、学生時代に、当時まだ草わけだった東京大阪間の旅客機に乗り、大学新聞に一頁を費す写真入りの搭乗記を載せたのがご自慢。

その時、大学新聞を編集していたのが、便所や落書の研究で有名で、厠博士になった李家正文氏。

飛行機の方は無事目的地に到着したが、軍隊教練をサボったというので落第の憂き目を見たのはお気の毒だった。

井上さんには熊の皮綺譚というのもある。

奈良へ旅行したときのこと、相当な宿屋の一番いい部屋にとめてもらった。すばらしい宿屋に泊って見たいと、かねがね思っていたからである。

大正十四年ころだったが、宿泊料が七円だったそうである。その時分の七円といえは相当なもの。熊の皮が敷いてあり、すばらしい部屋だった。珍客さまとばかり、いとも丁重に扱われた。

「十九の時だったが、年は若いし、金も無さそうだったので、無銭飲食されてはかなわぬと思つたらしく、便所へ行くにも、顔を洗いに行くのにも、女中か、女将がついて来たのには参つたね」

と、ときどき、こぼすが満更でもなかったようである。

脱線つづきに井上さん達と同じ学生寮にいたI先生——いま早大の講師をしている——の失敗談を申しあげることにする。

学生時代に五、六人の友達と潮来に旅行したときのことである。

昼間、水郷の絶景にタンノウしたご面々、夕飯がすむと、こんどは夜の粹郷見物としゃれこんだ。とあるアイマイ屋で心ゆくまで実地見学に及んで意気揚々とご帰館。

便所に行ったら、うすぐらい片すみに一本のビンが立っていた。今でこそ文化の恵沢に浴し、夜の便所もあかるいが、三十何年も前のこと、それに安宿だったので、小さな電球が申訳程度についているだけだったから、何のビンかわからなかった。

てつきり洗滌液のはいつているビンと早合点してご使用になった。すこしビリビリしたそうだが、とんだお土産を持ちかえらなくてもすむ、これで安心と、快い眠りをむさぼった。